



「エルサレム」における「教会の覚醒」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): religion of Jesus, Jerusalem, cathedral cities 作成者: 安藤, 栄子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/181

「エルサレム」における「教会の覚醒」

安藤 栄子

On “Reawakening of the true church” in Jerusalem

Eiko ANDO*

(原稿受付日 平成10年 5 月 8 日 論文受理日 平成10年 8 月31日)

Abstract

In my recent thesis I elucidated the complicated and chaotic structure of *Jerusalem* by interpreting chapter 1. In this thesis I would like to explicate what Blake wants to say in chapter 2. In chapter 2 Blake defines "the Religion of Jesus" as "true Christianity" whose essence is 'Forgiving of Sins', on the other hand Judaism which insists on punishment for sin and emphasizes 'the ten commandments' is regarded as 'false religion' or 'dogmatic christianity' by Blake. According to Blake, England was the holy land ruled by Jesus but the Anglican Church in the 18th century was corrupt and adhered to false religion like Judaism. Therefore Blake first points out the decline and fall of the Anglican Church and then encourages it to remember the omnipresence of Jesus who always forgives sinners without judging or punishing them. Blake seems to describe in chapter 2 the restoration of the Anglican Church through the image of decline and fall, struggle and rebirth of Cathedral Cities like London, Bath and Ely.

Key words : Religion of Jesus, Jerusalem, Cathedral Cities

1. はじめに

先に *Jerusalem* (1804-1820) を論じた際にこの作品が多くの読者を当惑させている事実を指摘し、その理由を第1章を中心に分析することで明確にした¹⁾。この小論では第2章を取りあげるが、それはBlakeがこの作品を書くに到った動機の一つが第2章の「序」"To the Jews" に述べられてあると思われるからである。すなわち想像力の世界に覚醒した Blake の目にはかって

ロンドンにはエルサレム神殿が建てられ、英国はイエスに支配される「神の国」であったが(プレート27,11.1-24)、今では神殿は破壊され英国は悪魔に支配されていると映ったのである(同プレート、11.29-48)。Blakeの悲しみと怒りは彼を奮起させ、英国を再建させるために *Jerusalem* を執筆したのだと思われる。それでは彼はその思いをどのように描いたのであろうか。第2章を中心に論じてみたい。

2.

まず第2章の「序」"To the Jews" (pl.27)の冒頭8行

* 共通講座

を以下に引用しよう。

Jerusalem the Emanation of the Giant Albion!
 Can it be? Is it a
 Truth that the Learned have explored? Was
 Britain the Primitive
 Seat of the Patriarchal Religion? If it is
 true, my title-page is also
 True, that Jerusalem was & is the Emanation of
 the Giant Albion. It
 is True and cannot be controverted. Ye are
 united, O ye Inhabitants
 of Earth in One Religion, The Religion of
 Jesus, the most Ancient,
 the Eternal & the Everlasting Gospel. The
 Wicked will turn it to
 Wickedness, the Righteous to Righteousness.

"Jerusalem the Emanation of the Giant Albion! Can it be?"と問い Blake は英国 (Albion) とエルサレムとの関係の深さを指摘する。この一見すると Blake の独断とも思われる英国とエルサレムとの密着性を証明するために Blake はまず "Is it a Truth that the Learned have explored?" と問い、'the Learned' に示される 17, 18 世紀当時の考古学者達に言及する。なぜなら彼らは「古代のすべての宗教は互いに関連しあっていた」とか「ドルイド僧と族長とは密接な関係にあった」と述べたからである²⁾。そこから "Was Britain the Primitive Seat of the Patriarchal Religion?" と言われるように英国は古代イスラエルにおけるモーゼ以前の族長の宗教つまりユダヤ教の中心地であったことが類推されるのである。

そして "If it is true, my title-page is also True, that Jerusalem was & is the Emanation of the Giant Albion." の一行はエルサレムが単に過去のみならず現在も英国の "emanation" つまり「流出」であることを示す。エルサレムが英国の「流出」であることはエルサレムが英国の本質もしくは生命体であることを意味していると思われる³⁾。これはどのようなことを意味しているのだろうか。これを解く鍵は次の "Ye are united, O ye Inhabitants of Earth, in One Religion, The Religion of Jesus, the most Ancient, the Eternal & the Everlasting Gospel."にあると思われる。Blake は「この世の人々はイエスの宗教においてひとつに結ばれるのであり、それは最も古い宗教であり、永遠の福音である」と述べる。ここで「イエスの宗教」がいわゆる歴史上のキリスト教を意

味しないことはそれが「最古の宗教」と言われることから推測されよう。キリスト教はユダヤ教を母胎に誕生した宗教であり、ユダヤ教以前には存在しなかったはずである。それでは「イエスの宗教」とはなんだろうか。それはドルイド教 (英国の古代の宗教)、ユダヤ教、そしてキリスト教をも超越したいわばすべての宗教の母胎、根源であると思われる。そして "The Wicked will turn it to Wickedness, the Righteous to Righteousness." (11.7-8) と言われるように「イエスの宗教」を歪めそこから分裂することで「邪悪な宗教」と「義なる宗教」が誕生したのである。前者はドルイド教を後者はユダヤ教を指すと思われる。なぜならドルイド教においては罪を犯したものは罰として生け贄となることを要求されるからであり⁴⁾、一方ユダヤ教においてはヤハウェを唯一絶対の神と信じ [十戒] を厳守し義人となることを目標とするからである。このように罪にたいして罰を求め、そして律法を強要する宗教に対し Blake の「イエスの宗教」は彼自身の作品である「永遠の福音」(1818)にあきらかのように「罪の許し」を主眼とする。「イエスの宗教」のイエスこそは Blake の唯一の神であり、それは多なる宇宙万物を一に融合させる強力なエネルギーであり、愛と慈悲の本体であろう⁵⁾。エルサレムは現実のイスラエルの首都というよりは「イエスの宗教」が行われる国すべてに存在する永遠不滅の聖都と言えよう。エルサレムが英国の生命体であるということは英国で「イエスの宗教」が広く流布しているということであり、英国が「神の国」でありうることを示唆していると思われる。

ところですべての宗教がめざすべき "The Religion of Jesus" を「真のキリスト教」、「完全なる宗教」と呼ぶならば、罪ゆえの罰を求める宗教は「不完全な宗教」であり、多くのドグマを持つ「独断的キリスト教」と呼ばなければならぬ。Blake は「独断的キリスト教」を「27の天、あるいは教会」(Milton, 32:25)と呼び、いずれも対立を含む不安定な性質であると述べる⁶⁾。それでは18世紀の英国のキリスト教を Blake はどのようにみていたのだろうか。既に言及したように Blake は英国はかつて「イエスの宗教」が隅々まで行き渡った「神の国」であったと実感しすべての人々が無心に生きる様子を次のように描いている。(pl.27, 11.1-24).

The fields from Islington to Marybone,
 To Primrose Hill and Saint John's Wood,
 Were builded over with pillars of gold,
 And there Jerusalem's pillars stood.
 Her little ones ran on the fields,

The Lamb of God among them seen,
And fair Jerusalem his Bride,
Among the little meadows green.

.....

She walks upon our meadows green,
The Lamb of God walks by her side,
And every English Child is seen
Children of Jesus & his Bride.

Forgiving trespasses and sins
Lest Babylon with cruel Og
With Moral & Self-righteous Law
Should Crucify in Satan's Synagogue!

英国が「神の国」であったということは具体的には
カンタベリー、ロンドン、ヨーク、エジンバラという
4つの重要な大聖堂都市とその他の24の大聖堂都市
ではすべての聖職者達が「罪の許し」を実践し、貧民
のため心を尽くしたと Blake は言っているように思わ
れる。ところが

Albion's Spectre from his Loins
Tore forth in all the pomp of War:
Satan his name: in flames of fire
He stretch'd his Druid Pillars far. (11.36-39)

と言われるように Albion (英国) に理性 ('Spectre') の
力が急速に発達することで「イエスの宗教」は "Druid
Pillars" に象徴される「ドルイド教」のような「不完全
な宗教」に変貌し、それが今18世紀の英国を席卷す
るのである。このことについては後に再び言及する。
Blake は「不完全な宗教」に陥った英国を一方向的に非
難するのではない。Blake 自身も「不完全な宗教」に
陥ったことがあることを認め次のように告白する
(11.65-80)。

And O thou Lamb of God, whom I
Slew in my dark self-righteous pride,
Art thou return'd to Albion's Land?
And is Jerusalem thy Bride?

Come to my arms & never more
Depart, but dwell for ever here:
Create my Spirit to thy Love:

Subdue my Spectre to thy Fear.

Spectre of Albion! warlike Fiend!
In clouds of blood & ruin roll'd,
I here reclaim thee as my own,
My Self-hood! Satan! armed in gold.

Is this thy soft Family-Love,
Thy cruel Patriarchal pride,
Planting thy Family alone,
Destroying all the World beside?

イエスを殺すのは常に "dark self-righteous pride" と言わ
れる「自我」である、自己中心的な心である。Blake
は自分が犯した過ちを深く悔いて再びイエスのもとに
帰ろうとするのである。Blake はさらに「暗い独善的
誇り」をユダヤ教徒の「残酷な族長的な誇り」と同一
視する(1.78)。ユダヤ教徒は「十戒」を遵守しヤハウェ
の前に義人であることに民族的誇りを覚え、異教徒を
殺戮するのであるが、「不完全な宗教」を克服した Blake
は彼らの残忍な行為に対し「ワトソンの「聖書の弁護」
にたいする書き込み」の中で激しく抗議する⁷⁾。ユダ
ヤ教徒の誇りは Blake には真実の神、イエスへのこの
うえない冒涇とうつつたのである。正義を愛し道徳を
重視するだけでは本当の宗教に到ることは困難であ
り、18世紀の英国国教会が体现するキリスト教はユ
ダヤ教同様「不完全な宗教」に留まると Blake には思
われた。第2章の主眼はこの「序」でほぼ述べられた
と思われるが、さらに本文を分析していくことにしよ
う。

3.

本文冒頭には "punisher", "judge" つまり「処罰者」
「審判者」としての Albion が登場する。彼の足元か
らは "Moral Virtue", "the Law Of God" すなわち「道徳的
美德」、「神の掟」と同一視される一本の「死の木」("A
deadly tree") が現れる (pl.28, l.15)。「死の木」は「神秘の
木」とも呼ばれ、「知恵の木」を意味すると思われる
⁸⁾。つまりそれは理性の働きを意味するのであり、理
性は想像力と分離すると「掟と道徳を組立て神の肉体
である想像力を破壊する」のである (pl.74, ll.10-14)。
Albion は理性的となり道徳、掟を重んじるが、その結
果次のような行動にでる。

From willing sacrifice of Self, to sacrifice of
(miscalled) Enemies
For Atonement. Albion began to erect twelve
Altars
Of rough unhewn rocks, before the Potter's
Furnace.
(pl.28,11.20-22)

上の引用文中「進んでする自己の犠牲」とは自分自身を相手のために犠牲とすることで、「完全な宗教」である「イエスの宗教」が説く「自我滅却」を意味すると思われる。しかし Albion は自分を否定することを止め、その代わりに「敵」を犠牲にすると言うのである。敵と味方とを区分し、味方のために敵を抹殺するのも理性の残酷な働きと言えよう。「twelve Altars」「12の祭壇」はイスラエルの12支族を想起せしめよう。彼らはヤハウエのために異教徒を殺戮することを美德とする義なる民である。Albion も味方のために敵を犠牲にしようとしており、理性の持つ冷酷さがユダヤ民族と Albion を通して浮き彫りにされる。さらに Albion は自分の分身である息子達を「最初の違反者」とよび、「生け贄」にしようとするが、彼らは「身代金を求めて山に逃亡した。」(pl.28,1.25)「不完全な宗教」と呼ばれているユダヤ教の族長時代にもイサクは父アブラハムに従い生け贄になることを潔しとしたが⁹⁾、理性化が広がり自我が支配的な18世紀の英国では息子は父に逆らい自分以外のものを身代わりにしようとするのである。このように Albion の理性化が深刻化すると

"Battersea & Chelsea mourn, London &
Canterbury tremble"
(pl.33 (29)1.12)

ということになるのである。Blake は"for Cities Are Men, fathers of Multitudes"(pl.38 (34)11.46-47)と述べ、「都市」と人間とは父と子のように愛しあい、底いあうと考える。つまり父である都市が悲しみ、震えるのは明らかに異様な事態である。とくに上のロンドンとカンタベリーは主要な大聖堂都市であり、それらが震えるのは大聖堂都市に象徴される英国国教会の不安定を示すものと思われる。国教会は17世紀の清教徒革命とその後続いた宗教論争により疲弊したのであり、18世紀になると宗教的情熱はすっかり冷めてしまっ

たといっても過言ではあるまい。主教の多くは政党と組んで積極的に政治に参加するようになり、当然のことながら主教区の福祉等には関心を示さず、さらに富裕な主教位への昇格をあからさまに望むようになったのである¹⁰⁾。Blake は国家とこれに媚びを売る教会を激しく攻撃するが、*Songs of Experience* の"The Garden of Love"では教会から愛が失われ、掟と律法で無垢なる魂をしばり苦しめる聖職者の冷淡さが以下のように歌われる。

And the gates of this Chapel were shut,
And "Thou shalt not" writ over the door;
So I turn'd to the Garden of Love
That so many sweet flowers bone;

(第2連)

And I saw it was filled with graves,
And tomb-stones where flowers should be;
And Priests in black gowns were walking their rounds,
And binding with briars my joys & desires.

(第3連)

このように国教会内部は腐敗しており、その上国教会は理神論からの攻撃を受けねばならず、18世紀の国教会は内憂外患の状態に直面し、四苦八苦の有様であったと言えよう。大聖堂都市ロンドンとカンタベリーとはこの不安のために震えていたのである。

4.

それでは霊的な危機に直面する国教会にそして Albion に救いはあるのだろうか。確かにイエスは迷える子羊 Albion のあとからついてきており、救いの手を差し伸べるのである。

And the Divine voice came from the Furnaces,
as multitudes without
Number, the voices of the innumerable
multitudes of Eternity!
And the appearance of a Man was seen in the
Furnaces
Saving those who have sinned from the
punishment of the Law
(In pity of the punisher whose state is

eternal death)
And keeping them from Sin by the mild
counsels of his love.
(pl.35 (31) ll.3-8)

ここに罪ゆえの罰を主張する「独善的キリスト教」に陥っている Albion と国教会の「真のキリスト教」への転換の鍵が示されてある。それは自己に目を向けず敵を心から許すことである。「罪の許し」を実行することである。それは理性的であってもできないし、理性を否定しようとすることによって実現しない。想像力の世界に目覚めて愛に生きるという別な情熱を持つことによってのみそのジレンマを抜け出せるのである。この時我々は二元の世界を出てイエスとともにあり、すべての人々と調和ある世界に生きるのである。そして次の引用に見られるように「真のキリスト教」「イエスの宗教」を具体的に体験するのである。

"Mutual in one another's love and wrath all renewing
"We live as One Man;for contracting our infinite senses
"We behold multitude,or expanding, we behold as one,
"As One Man all the Universal Family,and that One Man
"We call Jesus the Christ; and he in us,and we in him,
"Live in perfect harmony in Eden, the land of life,
"Giving, recieving, & forgiving each other's trespasses."
(pl.38 (34) ll.16-22)

するとまず大聖堂都市ロンドンに宗教的情熱が蘇る。
ロンドンは

He says:"Return, Albion, return! I
give myself for thee:
" My streets are my Ideas of Imagination.
"Awake, Albion, awake! and let us awake up
together."
(pl.38 (34) ll.30-32)

と Albion を励ます。すると 24 の大聖堂都市にイエスを中心とする「神の家族」が次のように現れる。

And these the Twenty-four in whom the Divine Family
Appear'd;and they were One in Him, A Human Vision!
Human Divine, Jesus the Saviour, blessed for
ever and ever.
(pl.40 (36) ll.45-47)

さらに Blake は続けて

Selsey, true friend! who afterwards
submitted to be devour'd
By the waves of Despair, whose Emanation rose above
The flood and was nam'd Chichester, lovely
mild & gentle! Lo!
(ll.48-50)

と歌い一度は理性の波に屈したが、チチェスターとして再生したセルシーを祝福するのである。次にウィンチェスターも "Winchester stood devoting himself for Albion" (l.53) と活気を取り戻し Albion のために自分を捧げると約束する。

ところで 24 の大聖堂都市の中でバースへの Blake の評価は高く以下のように述べる。

Bath, mind Physician of Eternity, mysterious power,
Whose springs are unsearchable & knowledge infinite.
(pl.46 (41) ll.1-2)

このバースが詩的情熱を持って唯一閉じているゴルゴヌーザ (Golgonooza) の西の門を通し深い「知恵」を語るのである¹¹⁾。

"And merciful the Individuality, however high
"Our palaces and cities and however fruitful
are our fields,
"In Selfhood, we are nothing, but fade away
in morning's breath.
"Our mildness is nothing: the greatest
mildness we can use
"Is incapable and nothing: none but the Lamb
of God can heal

"This dread disease, none but Jesus. O Lord,
descend and save!"
(pl.45 (40) ll.11-16)

一つだけ閉じている西の門は「舌の門」と呼ばれ
(pl.131.25)言葉と関わると思われる。Albion がバース
の語る言葉を深く味わい認識を深める時、西の門は開
き Albion は永遠界に飛翔し「イエスの宗教」へ覚醒
するのである。バースに続きヘリフォード、リンカー
ン、ダラム、カーライル、イーリー、オックスフォード
等の大聖堂都市も生命の息吹を湛え、Albion に心か
らの援助を次のように贈るのである。

Hereford, ancient Guardian of Wales, whose hands
Built the mountain palaces of Eden,
stupendous works!
Lincoln, Durham & Carlisle, Counsellors of Los,
And Ely, Scribe of Los, whose pen no other hand
Dare touch: Oxford, immortal Bard, with eloquence
Divine he wept over Albion speaking the words of God
In mild persuasion, bringing leaves of the Tree of Life.
(pl.46 (41) ll.3-9)

5. むすび

以上 Blake は第2章においてかつてはイエスが
存在する「神の国」であった英国が18世紀の理性至
上主義の嵐にもてあそばれ硬直化し「不完全な宗教」、
「独善的キリスト教」へと墮落するが、ふたたび「罪
の許し」を説く「真のキリスト教」、「イエスの宗教」
に覚醒していく様子を大聖堂都市のイメージを通して
描いていると言えよう。

註

Blake の作品からの引用は Geoffrey Keynes ed.,
The Complete Writings of William Blake (London: Oxford
University Press, 1969) による。

1) 拙著 「W. ブレイクの「エルサレム」について」
室蘭工業大学紀要 第47号 (1997年) を参照
のこと。

2) W.H.Stevenson ed., *The Poems of William Blake*,
(London: Longman Group Limited, 1971), p.676.

3) "emanation"は人間が互いに愛し合い結ばれるため
に必要な人間に内在する女性的分身である。
(S.F.Damon, *A Blake Dictionary: The Ideas and Symbols of
William Blake* (Providence, Rhode Island: Brown University
Press, 1965), pp.120-121.) 例えば Albion の4つの精神機
能 (=the four zoas) である Urizen (理性)、Luvah (情熱)、
Tharmas (肉体)、Los (詩的想像力)、はそれぞれ emanation
をもっており emanation と一つに融合することでおの
おの機能を完全に果たすのである。この場合
emanation は zoa の生命力、本質を意味すると思われる。

4) S.F.Damon, *A Blake Dictionary*, p.109.

5) 拙著 「ブレイクの「四つのゾア」について」
「イギリス・ロマン派研究」第18号 (1994年)
参照のこと。

6) Damon, *A Blake Dictionary*, pp.181-182.

7) *The Complete Writings of William Blake*, p.387.

8) *A Blake Dictionary*, p.410.

9) 「創世記」22章 (1-12節)

10) J.R.H.ムアマン「イギリス教会史」、八代崇他共
訳 (聖公会出版、1991年) 365-366頁。

11) ゴルゴヌーザは Los が Albion を再生させるため
に建てた幻想的な芸術の都市である。そこにある東
西南北の門のうち、西の門だけは「最後の日」まで閉じ
ていられる。Damon, *A Blake Dictionary*,
pp.163-164.